

国際地域文化プロジェクト研究 インターンシップ研修実施報告書

南山大学国際地域文化研究科

2022 年度

Q2・Q3『国際地域文化プロジェクト研究』

疋田 浩子

Arugumedo Mendoza Ana Cristina

Au Yeung Chun Ni

田中 万桜

この報告書は、南山大学国際地域文化研究科が開講するインターンシップ科目「国際地域文化プロジェクト研究」（2022 年度）を受講した院生の活動記録です。今回のインターンシップ先は、豊田市国際交流協会（Toyota International Association, TIA）です。同協会理事長の豊田彬子氏のご厚意により、国際フォーラムを企画し開催する機会をいただきました。まず、ここに記してお礼を申し上げます。

この「国際地域プロジェクト研究」は、将来国際的な分野で活躍する公務員や企業人、団体職員など高度な専門性を持つ職業人を目指す人のためのプロジェクト実践講座です。国際分野における官公庁や独立行政法人、企業、学校法人、国際交流や国際協力を活動目的とする公益財団法人及び NPO・NGO の実務経験者が実際に直面する課題を提供してもらい、その課題を具体的に協働して解決する手段を院生が模索する機会となっています。

豊田市国際交流協会は、国際交流、国際理解、多文化共生を目指し、市民の皆さんが地域に根差した交流を実践する場として様々なプログラムを展開しておられます。院生は、そのような交流の場で何ができるか議論を重ね、「誰一人取り残さない」社会を目指す SDGs の実践として、皆が住みやすい社会を目指すにはどうすればよいか、を議論するフォーラムを開催することにしました。そこで、お互いを理解するための「ことば」に着目し、「ことば」そのものがコミュニケーションを阻む「壁」になっているのではないか、と仮説を立てました。それを検証するため、外国にルーツを持つ人々に取材し、そこから得た考察を発表することにしました。そのうえで、参加者と議論し、参加者の経験から学ぶことにしました。

9 月 18 日フォーラム当日は、高校生、社会人から研究者まで、様々な背景を持つ 30 名の方々が参加してくださり、それぞれの経験を語り合いながら議論を深めました。

以下、院生による当日の発表資料と、国際フォーラム後に国際地域文化研究科で行った報告会（9 月 29 日）の発表資料を含め、活動報告としてここにまとめます。

最後になりましたが、このインターンシップのためにご指導・ご助力をいただきました Carl Taffe 氏をはじめ豊田市国際交流協会の皆さま、そして、準備のための講義と院生の指導にあたってくださった桜花学園大学の塚本江美氏に心から感謝を申し上げます。

<参加インターン生>

疋田浩子、Arugumedo Mendoza Ana Cristina、Au Yeung Chun Ni、田中万桜

<インターンシップ先>

豊田市国際交流協会 [豊田市国際交流協会 \(tia.toyota.aichi.jp\)](http://tia.toyota.aichi.jp)

<添付資料>

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1. 国際フォーラムのポスター | 2. 南山大学によるプレスリリース |
| 3. 当日のプログラム | 4. 国際フォーラムを報じた中日新聞記事 |
| 5. 院生 4 名による発表資料 | 5. 院生 4 名による事後報告資料 |

1. 国際フォーラムのポスター



Presented by 南山大学大学院生
(国際地域文化研究科)

SDGs Café

ことばの壁をなくそう！

Moving Beyond Language Barriers!

みんなが住みやすい社会をつくるために
一人一人ができることを考えてみましょう！



9/18 (日・Sunday)
13:30~15:30

豊田市国際交流協会 (産業文化センター3F)
TIA (Sangyo Bunka Center 3F)

定員: 50名 Limit: 50 people
参加費: 無料 Admission: Free

お申し込みは9月6日(火)午前10時より
お電話にて受け付けいたします。



Apply at TIA: 0565-33-5931
From 10 a.m. on September 6 (Tuesday)



公益財団法人豊田市国際交流協会
Toyota International Association

感染症対策へのご協力
をお願いいたします。

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

2022 年 9 月 9 日

Press Release

報道関係・教育担当記者 各位

**本学大学院生による国際フォーラム開催のお知らせ
『SDGs Café ことばの壁をなくそう！』**

平素は、本学の広報活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さてこの度、本学大学院国際地域文化研究科の院生による国際フォーラムを下記のとおり開催します。

国際地域文化研究科では、「国際地域文化プロジェクト研究」講義の一環としてインターン研修を実施しており、本フォーラムは豊田市国際交流協会でインターンに取り組む院生が企画運営するものです。「誰一人取り残さない」社会を目指す SDGs の実践として、皆が住みやすい社会を目指すにはどうすればよいか、がテーマです。

メキシコ、香港、日本出身の 4 名の院生が、外国にルーツを持つ人々が抱えている日本社会での「壁」、特に「ことばの壁」をキーワードとして、インタビュー活動に取り組み、学校やコミュニティ、企業など、様々な場にある「壁」は、「ことば」だけではないことが見えてきました。参加者の皆さんと意見交換しながら、一人ひとりが身の回りにある「壁」に気づき、それを乗り越えるためにはどうすればよいのか、考える機会にいたします。

つきましては、取材、報道等におきましてお取り扱いいただき、広く一般に周知いただければ幸いです。恐れ入りますが、取材にお越しいただける場合は、事前に国際地域文化研究科事務室までご連絡をお願いいたします。

記

日 時：2022 年 9 月 18 日（日）13:30～15:30

場 所：豊田市国際交流協会（産業文化センター3 階）

テーマ：SDGs Café ことばの壁をなくそう！ Moving Beyond Language Barriers

第一部：院生 4 名によるプレゼンテーション

コメンテーター 豊田市国際交流協会 Carl Taffe 氏

第二部：一般参加者と意見交換

参加申込み：定員 50 名 豊田市国際交流協会にて電話受付：0565-33-5931

9 月 6 日（火）午前 10 時より

その他：ポスターあり（添付）

以上

■本件に関するお問い合わせ先

南山大学大学院国際地域文化研究科事務室 〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18 番地

Phone 052-832-4327

Email fs@nanzan-u.ac.jp

3. 当日のプログラム

SDGs Café

ことばの壁をなくそう！

Moving Beyond Language Barriers!

Toyota International Association (Toyota), 18 September 2022

PROGRAMME

13:30 Welcome and opening remarks by Hideaki Sakamine, TIA

13:35-14:00 Presentation: Graduate School of International Area Studies, Nanzan University

1. Au Yeung Chun Ni
2. Arugumedo Mendoza Ana Cristina
3. Hiroko Hikita
4. Mao Tanaka

14:00-14:05 Comment and discussion

Discussant: Carl Taffe, TIA

14:10-14:25 Coffee Break (Run Arung Family Coffee <organic>, Chiangmai, Thailand)

Group Making

14:25-14:40 Discussion (by groups): *Sharing own experiences*

14:40-14:55 Discussion (by groups): *How to overcome the barriers?*

14:55-15:15 Groups' Comments and Questions

15:15-15:25 Concluding remarks by graduate students

15:25- (Questionnaire)

4. 中日新聞記事 (2022 年 9 月 19 日朝刊)】



中央に和室がある客室＝蒲郡市の西浦グランドホテル吉慶で②貸し切りサウナルームのイメージ＝平野屋提供
①レストランで牛まぶしを紹介する兼子さん＝同市のホテル三河海陽閣で

ジブリパーク 客足回復

さん(み)は好材料として、十一月のジブリパーク開園、二五年の大阪・関西万博、県内が会場となる二六年のアジア競技大会を挙げ「今は大変だが、各旅館とも先を見据えて改装などに取り組み、受け入れ態勢を整えて前に進もうと努めている」と強調する。

「やりたいこと」
学生らプレゼン

豊橋でイベント

学生たちがそれぞれ目標を発表するイベント「火おこしアワード」が十八日、豊橋市駅前大通のココラア

式典と祈願祭には選手や生徒、地元住民ら約二十人が参加し、完成を祝った。玉串を奉納した足助中一年の高木望さん(三)は「(飯盛山が)再整備されてうれしい。もっといろいろな足助らしい名所がきれいになればいいな」と話した。今後は道や木々の手入れなどの再整備を続ける。(服部桃)

言葉の壁について議論する参加者＝豊田市国際交流協会



高校生ら40人参加
「言葉の壁」を議論
豊田でフォーラム

日本やメキシコ、香港という異なるルーツを持つ南山大大学院生四人が企画運

院生四人は、国際地域文化研究科に所属する修士課程一年。授業の一環で、六月からTIAでインターンシップ(就業体験)をしている。TIAと接点の少ない若い世代を巻き込んでほしいと考えたTIA理事長の発案を受け、フォーラムを企画した。

前半は、院生たちがそれぞれの視点で、外国にルーツを持つ人たちに言葉の壁を感じた経験について取材した内容を基に、原因や解消の仕方を発表した。後半は、参加者や院生が五グループに分かれて討論。「パンフレットでは、できるだけ易しい日本語や英語を使



「火おこしアワード」でプレゼンをする学生＝豊橋市駅前大通で

日本語に不自由ない 高度技能を持つ在留外国人の視点から

日本企業における留学生の就労に関する調査
を踏まえて



南山大学大学院 国際地域文化研究科 疋田 浩子
(hirokoh0909@gmail.com)

インタビュー対象者

30代から40代のアジア系研究者2名：

日本の大学に留学し学位を取得

- ・ 日本語◎、仕事は多岐、日常生活に困らない
- ・ 日本で高等教育を受け、日本企業に就職し、都心に住む
- ・ 英語も堪能で、広い範囲でサポートがある



そこに潜む問題点とは？

高度技術を持つ在留外国人予備軍である留学生を
対象としたアンケート調査

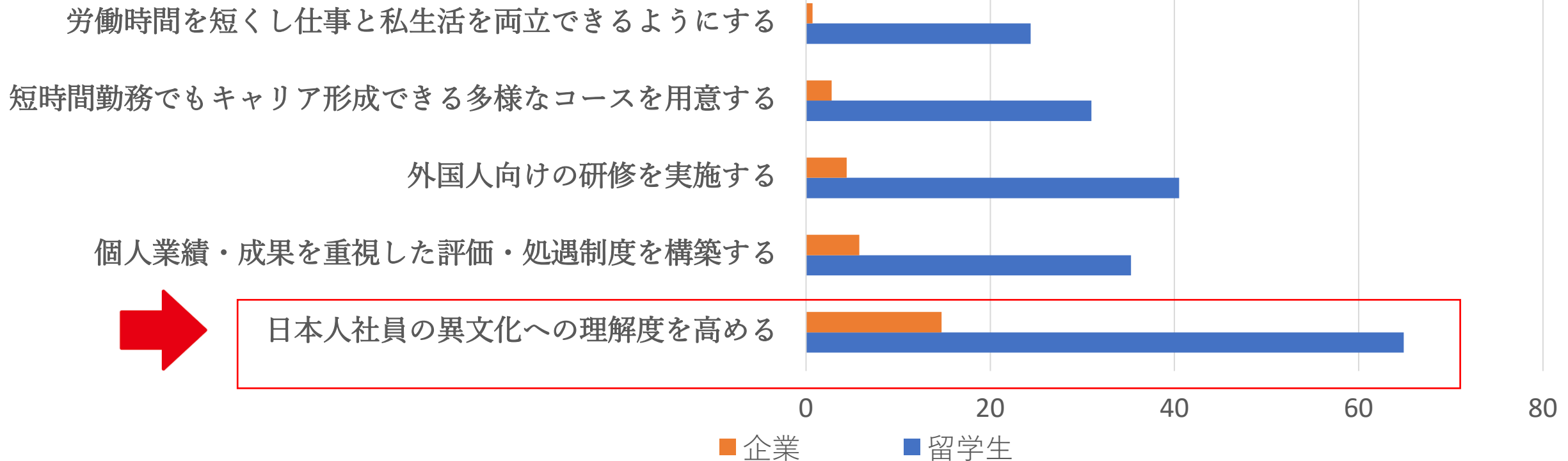
日本企業における留学生の就労に関する調査

出典：独立行政法人労働政策研究・研修機構（2009）

「留学生の定着・活躍のための施策について企業側が取り組んでいること、留学生が取り組むべきと考えること」

- ◆ この調査における「外国人」とは日本の国籍を有しない者をいいます。ただし、入管特例法における「特別永住者」はこの調査では外国人には含みません。
- ◆ 「留学生」とは日本国内の短大・高専または大学・大学院に留学し、その後正社員またはフルタイムの契約社員として採用された外国人をいいます。
- ◆ 「正社員」とは、期間の定めのない労働契約によって働いている社員をいいます。◆ 「契約社員」とは有期の雇用契約でかつ、フルタイムで働く社員をいいます。したがって、短時間勤務のパート・アルバイト社員はここでは契約社員にみません

企業n=703、留学生n=902、複数回答、単位=%



日本の異文化に対するジェネレーションギャップ

- 同化は当たり前？ ⇒ 社会や企業の古い意識の壁
- 日本人学生にとってもずれがある？
- そのうえで大切と思われること
 - ○○人、ではなく、その人個人を見ているか？
 - 固定観念にとらわれていないか？

他に何ができるだろうか？



インタビューの内容から読み取れる 異文化コミュニケーション問題と ことばの壁



Argumedo Mendoza Ana Cristina
アルグメド・メンドサ・アナ・クリスティーナ
armeancr92@gmail.com

インタビューした人

女性 3 人 (3 Women)

年齢 (Age) 17, 30, 33 歳

職業 学生：1人
働いている人：2人
(Occupation : English Teacher, Fitness Coach)

言語力 母国語 スペイン語 Spanish ポルトガル語 Portuguese
英語 English
日本語 Japanese A1-A2 (N5-N3)

日本在住期間 6 か月～3 年まで (6 months to 3 years)



ことば (Language) の問題

- 英語圏の方々は日本人に英語でのコミュニケーションを求め
るけれども、日本人は英語圏ではない国の人たちに日本語か
英語でのコミュニケーションを求める (言語支配)

English speakers expect Japanese people to communicate in
English, while Japanese people expect other people to
communicate in Japanese (Language Domination)

- ほんね と たてまえ (わからない)

Honne and Tatemae (Difficult to Understand)

心 (Heart) の問題

- ◆自分の気持ちが相手に通じない

Difficulty to express our feelings

- ◆悔しさ、もどかしさ、フラストレーション

Struggle and frustration

- ◆日本人の友達を作ることが難しい

Making Japanese friends is difficult

制度 (Institution) 問題

- ◆働く時間が長くて、ワークライフバランスの質が低い

Bad work-life balance and long working hours



ことばの壁をなくそう！



南山大学に通っている
外国のルーツを持つ大学生の視点から考える

南山大学大学院 国際地域文化研究科

オウヨウ ジェニー

連絡先：auiyangyang.aycn@gmail.com

南山大学に通っている外国のルーツを持つ大学生の視点から

《インタビュー対象者》

20代の大学生5名：南山大学の国際教養学部及び外国語学部の学生

- ・ **メキシコ、ベトナム、中国**出身の**留学生**
- ・ **在日韓国人、フィリピン**のルーツを持つ学生
- ・ 自分自身だけではなく、家族の方、及びそれぞれのコミュニティにいる方が経験していること
- ・ 南山大学で学んでいる知識を活用し深く考えた上での意見



ことばの壁をなくすためには



皆さんが経験したことばの壁



- ・ 誤解、不理解から生まれるストレス
 - (例) アルバイトで忙しくなり、早口で何かを言われて、反応できない時
 - (例) 日本人若い人同士で使う流行り言葉を理解しにくい時
- ・ ことばの壁より文化の壁
(マナー、時間の感覚、働き方、ユーモアの取り方、食文化、生活習慣など)
 - (例) メキシコで相手と話す時に、「eye contact」が大事
- ・ 大学生より、働いている大人、親の方が困っている
 - 大学生、特に南山大学：「人間の尊厳」
 - 日本語が堪能ではなく、働いている大人の方が困っている

ことばの壁は誰が作ったか？責任は誰にある？

- ①自分自身から：努力
- ②相手から：努力
- ③個人より、家庭内の教育、学校の方針、政府の政策などが、「壁」を作るか、無くすかに繋がっている



そのうえで大切と思われること

「言葉自体の問題ではない。
相手を受け入れることが大事。
言語が通じなくても相手を思いやることができる。」



一人の学生の経験：
最初に日本に来た頃、全く日本語わからなかった
それでもずっとそばにいてくれる小学校の友達

自分自身の経験：
夏にイタリアで国際フォーラムに参加
言語が通じなくて、「話せなくても」、
そばに一緒にいたいと思ってくれて、
暖かく迎えてくれる方々

「学校」におけることばの壁から考える 地域ボランティアの在り方



南山大学大学院 国際地域文化研究科

田中 万桜

mail: m22aa002@m.nanzan-u.ac.jp

外国に繋がりのある生徒と保護者、 日本人教師が経験したことばの壁とは・・・？

<インタビュー対象者>

・5名：中国出身60代男性/スリランカ出身50代男性/インドネシア出身50代男性・40代女性/40代日本人女性

※3名が20代に留学目的で来日。1名が結婚を機に30代に来日。日本語に問題ない。子どもがいる方もいた。

※日本人女性は外国に繋がりのある生徒が数名在籍する中学校で理科教員をしていた経験あり。

<インタビューから明らかになったこと>

教師の声

- ・生徒だけでなく教員も外国に繋がりのある生徒とコミュニケーションをとることが難しいと感じる機会が多々あった。
- ・教室の中で孤立してしまっている生徒もいたが見守ることしかできなかった。
- ・日常会話に問題がなく学校生活に馴染んでいるような生徒でも、テスト結果を見ると授業についていけないことが見受けられた。

生徒の保護者の声

- ・日本で義務教育を経験していなかったため、日本の受験や就職活動に関して知らないことが多く子どものサポートに悩んでいる。
- ・必要な情報や有益な情報がことばの壁によって手に入っていないのではないかという懸念。

サポートに“地域差”がある？

➤ NPO団体や地域ボランティアによる日本語教室

➤ 学校への言語相談員の派遣

※言語相談員・・・通訳のような役割。(ポルトガル語・スペイン語・フィリピン語など)
授業の内容や連絡事項を生徒・保護者が理解できるように伝える。

➤ 国際交流協会や地域コミュニティによる情報提供・サポートの実施

豊田市の例:外国に繋がりのある生徒とその保護者を対象にした高校受験の説明会
豊田市は市や学校の努力＋一般市民によるボランティア ＝ 手厚いサポート◎

しかし・・・

サポートを必要とする生徒が少ない地域や、ボランティアが少ない地域
⇒ 個人レベルのサポートが難しい現状もある。

“地域差”の問題が？

地域差の問題の解消に向けて



各地域には

- ・予算の問題 (雇える言語相談員の数)
- ・人員の問題 (ボランティアが集まらない) などがあり、地域サポートには限界も。

既にできる限りの努力は市・学校・ボランティアベースで行われている

地域関係なくすべての外国に繋がりのある方々にサポートには、
市・学校・ボランティアに委ねすぎず政府による支援も必要
ボランティアの構造的な在り方を見直すべきではないか？

国際地域文化プロジェクト研究

豊田市国際交流協会インターンシップ 全体報告

2022年9月29日

国際地域文化研究科 Ana, 疋田, Jenny, 田中

Q2座学内容

Mr. Carl Taffe
(TIA)

塚本江美先生
(桜花学園大学)

- ◆日本の多文化社会・豊田市を考える
 - 多文化共生社会が目指されるまでの歩み
 - 豊田市の在留外国人の雇用データ等
 - 保見団地での多文化共生を目指した取り組み
- ◆公益財団法人豊田市国際交流協会（TIA）を知る
- ◆マイクロアグレッション
 - 外国人という言葉への違和感。→ことばの壁の一つ

フォーラム 準備期間

◆フォーラムのテーマ決め

ジェンダー×言語に関する研究（Ana）

教育に関する研究（田中・疋田）

留学経験者（Ana・Jenny）

“SDGs”と“ことばの壁”をテーマに。

フォーラム 準備期間

- ◆フォーラムのコンセプト決め
参加者にも気軽にディスカッションしてもらいたい
→カフェスタイルを採用
- ◆フォーラムの構成決め
院生発表→コメント→グループディスカッション→参加者発表
- ◆チラシ・タイムテーブル作成
- ◆倫理審査委員会への申請

フォーラム 準備期間

◆役割分担

司会（田中）

タイムキーパー（疋田）

通訳（Ana・Jenny）

◆インタビュー実施

知り合い・南山大学の留学生・TIAで出会った皆さん

◆発表資料作成

◆ZOOMミーティングで調整・リハーサル



フォーラム当日の様子

豊田理事長へご挨拶&リハーサル



フォーラム当日の様子

坂峰専務理事によるご挨拶



フォーラム当日の様子

院生4名発表&TIAカールさんによるコメント



フォーラム当日の様子

参加者を交えてグループディスカッション&発表

塚本先生

カールさん

TIAの皆様

ゼミ生の皆様

ありがとうございました

2022.09.18



国際地域文化プロジェクト研究 豊田市国際交流協会インターンシップ報告

国際フォーラム『ことばの壁をなくそう！』

南山大学大学院 国際地域文化研究科 疋田 浩子
(hirokoh0909@gmail.com)

国際フォーラム『ことばの壁をなくそう！』

当日の発表内容（１）

- 取材先：日本語に不自由ない[高度技能を持つ在留外国人](#)
- 本当に不自由も壁もないのだろうか？
- 日本企業で就労する元留学生の就労に関する調査から見えてくる矛盾
（独立行政法人労働政策研究・研修機構（2009））
- 元留学生と企業側の意識のギャップ
「日本社員の[異文化への理解度](#)を高める」企業14.7% 留学生 64.9%

国際フォーラム『ことばの壁をなくそう！』

当日の発表内容（２）

- 同化するのが当たり前とする社会や企業の古い意識の壁
- 日本 の経営者の異文化に対するギャップ
- 多様な人々（才能やスキル）を受け入れる意識
- 日本の学生にとっても、同様のズレがあるのでは



国際フォーラム『ことばの壁をなくそう！』 発表後のディスカッションから

香港出身の会社員

- 文化、マナーに同化しないと怒られる
- マニュアルが厳しい
- 誰でも意見を言える場所が必要

日本企業で定年まで働いた日本人

- 世界の200年以上続く長寿企業 → 約7割は日本企業
- 日本式も悪くはない
- 外国人も同郷の人の話にしか耳を傾けない



TIAインターンで学んだ事

- 国際交流についてのイベントの企画という要請⇒大変貴重な経験
- 多文化共生や国際交流⇒TIAさんの大変な努力
- 国際交流のイベントやフォーラムを開催するまでプロセスを体験
⇒やりがいと自信
- このような企画を繰り返し行うことによって多文化共生や異文化理解を
考える人が増えていくきっかけになるのだと理解
- 事前の準備（進行と時間管理等）の大切さ、わかりやすい資料とプレゼン
が重要
- 事前の取材先や当日の参加者の実体験を交えての話し合いは現実の問題
を知る良い体験

反省点

- TIA豊田会長の要請に応えることができたかどうか
- 4人で集まってじっくり話し合うことができなかったのは残念だったが、とても良い雰囲気やり切れた
- 取材のために準備したアンケートの質問に工夫が必要だった
- 深めたい問題が複数あって、なかなか一つに絞り切れなかった
 - ⇒言いたいことはたくさんあり、まとめきれなかった
- 当日の参加者によるディスカッションで、意見が出るのか心配だったが、皆さん積極的に話してもらえた点はよかったが、その内容をシェアする時間がもう少しあればよかった
 - ⇒時間制約があるが、その中でも工夫できたかもしれない

今後にこの経験を生かすには

- 自分の気づかない問題を発見し考察するプロセスを体験
⇒今後の研究においても、様々な方向から考察・議論し、
知見を掘り下げる努力をしたい
- これからの発表の機会に今回の経験が生かせる
- このような貴重な機会を与えてくださったTIAの皆様に感謝
したい

国際地域文化プロジェクト研究

豊田市国際交流協会インターンシップ報告

2022年9月29日

国際地域文化研究科 M 1 2021AA701

Argumedo Mendoza Ana Cristina

armeanrg2@gmail.com

発表の流れ

- ・ 感謝 （TIA,NANZAN、グループメンバー）
- ・ 異文化コミュニケーション問題について I
- ・ 異文化コミュニケーション問題について II
- ・ グループディスカッション
- ・ Intercultural Communication in Contexts （本の紹介）
- ・ グループディスカッション
- ・ このインターン全行程を通して何を学んだか？
- ・ 国際イベントの経験から

異文化コミュニケーション問題について Ⅰ

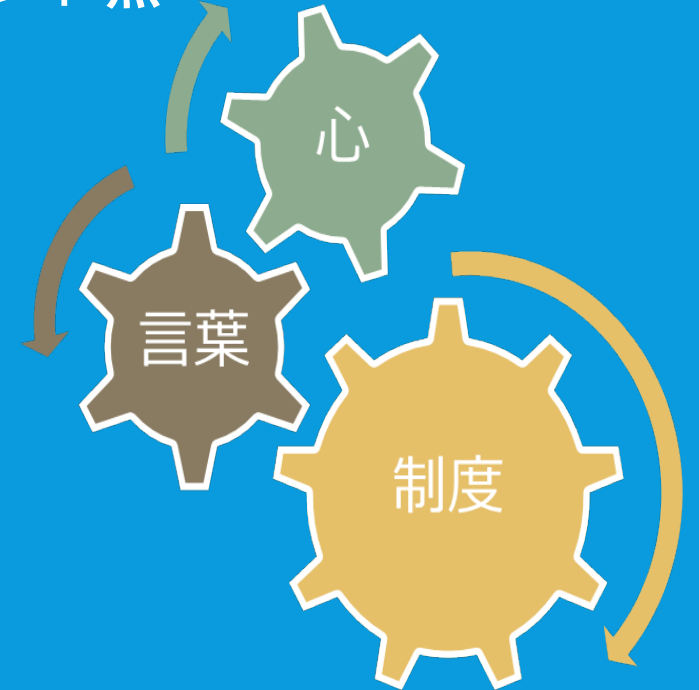
ーインタビューの内容：

インタビューされた人（3人）とインタビューのポイント

ーことばの壁

ー1992年（UN）の言語権（言語支配）

ー平等を召さずMDGs、SDGs（発展とはなにか？）



異文化コミュニケーション問題について II

1.序論 2.本論/仮設 3.結論/まとめ （レポート型）

1.異文化コミュニケーション問題定義

2.インタビューとインタビュアーの紹介X→支配されていると差別の存在○

3.言語支配、異文化コミュニケーションの三つの壁 -結び-

INTERCULTURAL COMMUNICATION IN CONTEXTS

- <https://www.amazon.co.jp/Inter-cultural-Communication-Contexts-Judith-Martin/dp/0073523933>

Intercultural Communication in Contexts, 7th Edition examines communication in multicultural relationships and provides the tools for effective communication amid cultural, ethnic, and religious differences in domestic as well as global contexts. Students are introduced to the primary approaches for studying intercultural communication along with a theoretical and practical framework for applying these approaches themselves. The varied backgrounds of coauthors Judith N. Martin, a social scientist, and Thomas K. Nakayama, a critical rhetorician, bring a unique viewpoint to the subject matter.

HIGHLIGHTS OF THE SEVENTH EDITION

- Examination of how peoples' cultural differences affect the way in which they communicate, both face to face and online, with personal first hand anecdotes throughout the book taken directly from individuals worldwide.
- Expanded discussion on the impact of war, terrorism and global migration on intercultural encounters.
- Updated discussion on the power of popular culture and how it influences society's perception of the world.
- Expanded discussion on the role of social media on intercultural encounters.
- **McGraw-Hill Connect** Provides students with the most innovative online learning environment by combining the SmartBook™ personalized reading experience, engaging assignments, and other powerful resources to ensure student success.

connect | What's Connect? | Resources | Features | Help | Sign In

Get Connected. Get Results.

McGraw-Hill Connect is a digital teaching and learning environment that saves students and instructors time while improving performance over a variety of critical outcomes.

USE FOR YOURSELF

Student Pass Rate

McGraw-Hill Education



**Mc
Graw
Hill
Education**



TABLE 2-1 THREE APPROACHES TO INTERCULTURAL COMMUNICATION

	Social Science (or Functionalist)	Interpretive	Critical
Discipline on which approach is founded	Psychology	Anthropology, sociolinguistics	Various
Research goal	Describe and predict behavior	Describe behavior	Change behavior
Assumption of reality	External and describable	Subjective	Subjective and material
Assumptions of human behavior	Predictable	Creative and voluntary	Changeable
Method of study	Survey, observation	Participant observation, field study	Textual analysis of media
Relationship of culture and communication	Communication influenced by culture	Culture created and maintained through communication	Culture a site of power struggles
Contribution of the approach	Identifies cultural variations; recognizes cultural differences in many aspects of communication but often does not consider context	Emphasizes that communication and culture and cultural differences should be studied in context	Recognizes the economic and political forces in culture and communication; asserts that all intercultural interactions are characterized by power

TABLE 2-2 THE SIGNIFICANCE OF RESEARCH APPROACHES

Social scientific	This research style emphasizes statistical measures. Understanding quantitative approaches is critical to analyzing data and statistics. These are skills important in any walk of life.
Interpretive	Interpretive approaches emphasize using language to describe human behavior. Understanding how news approaches is important to understanding how news is reported, how information is transferred, and how most people make decisions.
Critical	Critical methodologies analyze the large power structures that guide everyday life. Understanding this approach helps students grasp the invisible forces that alter our lives.

グループディスカッション

ーオーラルヒストリーの大切さ （歴史的、人類的）

ー環境を作るの大切、

（中国のルーツを持った方の発表）（イベントとネットワークの大切さ）

ー格差：年齢また世代、日本国内地域、文化の違い、など

ーSDGsはグローバルな目標ですが、**日本中心、日本人向け**

ーボランティア≠無料



このインターン全行程を通して何を学んだか？

OTIAのインターンシップから学んだこと⇔国際交流？という仕事の現場から学んだこと。

わずかな多国籍参加者だが、積極的に参加 ○

日本人に分かりやすい、日本人に親切、上下関係、日本人向け、
日本語で外国人（外国のルーツを持った人）について話す ？

TOYOTA INTERNATIONAL ASSOCIATIONの文化イベント紹介と言語イベントの方が、、魅力的だった

自分の研究・考察から学んだこと

- 人権、暴力、ジェンダー、Discursive Disadvantage
- 言語支配と言語権が日本であまり普及していない
- 社会的、グローバル化とトランスナショナルアクター
- 学んだことは、日本語、日本でPPTの上手な作り方
- オーラルヒストリの大切さ
- ことばとRepresentation、現実させることの困難
- インタビューを論理的に分析するの困難

国際イベントの経験から

- 1) 予算、目的、参加者のTransparency*** (あいまいさ) (外交的に)
- 2) 役割分担をはっきりさせる
- 3) イベント担当者の仕事はイベントの準備、公演はまたべつ
- 4) プロフェッショナルなコミュニケーションには24時間の連絡 NG ×
SNSのコミュニケーションルールとマナーを話し合っておく***
- 5) 講演者への礼儀：お水などを準備すること
- 6) お弁当準備や謝礼金、交通費等の予算管理
- 7) メディア対応：記者会見を開くこと、またはPress Releaseを渡すこと
- 8) 写真の担当を決めること
- 9) Participation Diploma